



Title	円地文子『女面』論：女性たちの「企み」の物語
Author(s)	齊田, 春菜
Citation	国語国文研究, 163, 41-54
Issue Date	2024-08-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/96086
Type	journal article
File Information	163_4.pdf



円地文子『女面』論

——女性たちの「企み」の物語——

齊 田 春 菜

はじめに

円地文子『女面』は、一九五八年四月から六月まで『群像』で連載され、一〇月に講談社から出版された。その後「著者の言葉」を加え一九六〇年七月に講談社の「ミリオンブックス」から普及版が出版された。

円地は、「著者の言葉」の中で「強いて言えば、能の『女面』の一面無表情な裡に包まれている夥しい女の喜怒哀楽の諸相を通して、女の悪を描いて見たかったのがこの作のモチーフと言えようか」と述べた。具体的にこの「女の悪」に関わるのが梅尾三重子のある「企み」（一六七頁）を指す。ある「企み」とは、三重子が、娘の春女を強制的に妊娠させ、出産させるといふものである。物語は、春女が亡くなり、赤児の誕生で幕を閉じる。

『女面』の研究は、「三重子の「企み」と「巫女」という表象を三重

子や亡くなった三重子の息子の妻である泰子、春女と関係づけて検討することが概ね不可分となっている。この三重子の「企み」を家父長制と関係づけて評価するのがその代表的な例である。さらにテクストはその「企み」の成就と成就のための手段となる三重子の「企み」への執着という三重子の執念の憑依現象である憑く―憑かれる関係の物語としても言及されてきた。具体的には、泰子と春女は、三重子の「霊」（一三〇頁）に影響を受ける「霊媒」（一三〇頁）であり、「巫女」としての三重子の支配下にある存在だという位置づけが大多数である。⁴

確かに「精神薄弱児」（一七〇頁）である春女は、母親である三重子に一方的に影響を受ける存在であるかもしれない。しかし泰子は、三重子から一方的に影響を受けるだけの存在だと言えるだろうか。例えば、『女面』に挿入された「野々宮記」で明石の君を六条御息所と類似した人物としている叙述を手掛かりにテクストを「明石一族の物語」として読む鈴木直子は「三重子が泰子に憑依して操っ

ている、という解釈もありうるが⁵と踏まえつつも「泰子の協力と同意を、三重子からの一方的な操作とみなしてしまうと、『女面』という作品のもう一つの側面である女同士の協力・絆という問題を見失ってしまうように思われる」と述べた。そして鈴木は「このように『女面』には女同士の無条件の共感と絆が描かれている⁷」、「娼婦性、産む性、そして家を支える賢女とに分断された女性たちは、それぞれの力と欠落とを補い合い、家父長制を家制度の内側から壊そうとしている、というのが『女面』という作品の本質であるように思う⁸」と指摘した。

女性同士の関係に重きをおく鈴木の説解であつても三重子が泰子に憑依しているという従来の解釈に囚われているが、実はテキストの叙述からでは、泰子が三重子に憑依されたのか、それとも泰子が三重子に主体的に協力したのかは明確に語られてはいない。つまり、三重子（の生霊または執念）が泰子に憑いたという明確な描写はなく、いずれも泰子が伊吹恒夫に説明したり、三重子に自己申告したりしているに過ぎないのである（後述）。

ではなぜ、本稿で三重子が泰子に憑いたという明確な叙述がないという点に注目するのか。結論を先取りすると、三重子と泰子の関係を憑くものから憑かれるものへという一面的な捉え方を再考するためである。

この双方向の関係に軸をおくことで廣尾理世子が指摘する「円地的伝達⁹」というコミュニケーションの問題へと接続ができるだろう。廣尾は、「三重子はあぐりの代弁者なのである——正確に言えば、三重子にはそう伝わったのである¹⁰」と三重子を夫の梅尾正継の

妾であり、三重子の最初の子の流産のきっかけを作ったあぐりの「代弁者」だと論じた。なお、あぐりは三重子が嫁ぐ前に身籠ったが正継が「世間体を憚つて墮胎させた」（一八〇頁）のであり、廣尾の解釈によれば「梅尾家に正当な跡取りの誕生は許さない——三重子の流産事件の影には、あぐりのこうした意志が働き、それは流産した三重子の肉体を通して、梅尾家の血へと放たれたのである¹¹」と三重子とあぐりの関係について言及した。つまり、憑く—憑かれる関係は、三重子と泰子以前、あぐりと三重子の間でも成り立っていたのであった。そして泰子が三重子に与えた影響も無視できないのである。

このように女性たちの「企み」は、先行者の意志を反復しつつ、差異を伴っているのである。確かに女性同士の関係は、重要であるがこの差異を念頭におくと鈴木が述べた「女同士の無条件の共感と絆」とまでは言えないだろう。この女性同士の関係の内実について丁寧に考察する必要がある。

そのため本稿では三重子とその「企み」との結びつきが、三重子の主体性を表すという理解や三重子の自己表現だという水田宗子が指摘している解釈¹²からも距離をとる。そして双方向性の問題は、家父長制への抵抗などといった評価を再考するものでもある。これにより家父長制から完全に自由にはなっていないものの、父系を排除した母系の血統をめぐる葛藤の物語としてテキストを読み解くことを試みる。

以上の点を踏まえ本稿では、テキストの中で特異な性質をも与えられた「巫女」や「巫女的」な女性という表象の内実を主に三重子

と泰子の関係から考察を試みる。そして三重子の「企み」との結びつきについても検討をする。その結果、テクストは、女性たちの「企み」の方に重点があり、その「企み」の成就によって、表面上は家長制に従いつつも、梅尾家の父系の純血を母系の血によって穢す物語となつてゐることを明らかにしたい。そして、泰子はそのような血縁幻想から一步自由な境地にたどり着く可能性を秘めていることも明らかにしたい。

一 『女面』における巫女像について

なぜ、三重子はそのような「企み」を行つたのか。それは、「巫女」という言葉とどのように関係するのか。まずは、「霊女」「十寸女」「深井」の全三章からなるテクストの梗概を確認して行こう。

梅尾三重子は、息子の秋生を雪崩事故で失つた。秋生は泰子と約一年前に結婚したばかりであった。泰子はその後も三重子の家に留まり、三重子の主宰している短歌雑誌の編集の手伝いをしたり、秋生が執筆していた「憑霊考」を引き継ぎ執筆したりしている。「憑霊考」を執筆するための研究グループがあり、泰子を中心に梅尾家で開催されている。このグループには、秋生の先輩で国文学者の伊吹恒夫（既婚）と伊吹の友人で精神科医の三瓶豊喜（未婚）が参加し、彼らは泰子に好意を寄せていた。ある日、四人は能の宗家である薬師寺の家を訪問し霊女や増女などの女面を見た。翌日、京都からの帰路の途中、伊吹と泰子は関係を持つ。帰京後、伊吹は、三瓶から三重子が戦前に執筆した「野々宮記」¹⁴を入手する（第一章 霊女）。

泰子は、三重子に伊吹との関係を打ち明ける。三重子は泰子に秋生と双子の妹で「精神薄弱児」（二七〇頁）の春女が、夫正継ではなく戦死した恋人との子供であると告白する。他方、伊吹と三瓶は、三重子が過去に流産したことを知った。流産の原因は、伊吹によれば夫の妾によつて「釘を梯子に植えられて流産させられ」（一八一頁）たのだった。しかし三重子は、流産後も離婚せず梅尾家に留まつた。その後伊吹は、泰子に会いに行くために梅尾家に行くが、伊吹の知らないうちに泰子と春女が入れ替わり春女とも関係を持つてしまう（第二章 十寸髪）。

伊吹が梅尾家に幾度か通い、その後春女は妊娠した。春女は秋生に似た男児を産むが、亡くなる。ある夜、三重子は薬師寺から贈られた深井の面を眺めていると、その面が「秋生と春女の生命の消えて行つた悲しみ」（二一九頁）と「自分の中に深く秘めて来た毒々しい女の企み」（二一九頁）を「皆知っている」（二一九頁）と感じた。その後「赤児の泣く声が聞え」（二一九頁）三重子は、面を落とした。「三重子は打たれたように急に痺れた右手を空に上げたまま、畳に上向いてゐる面の上に、蔽うように片手をのばした」（二一九頁）（第三章 深井）。

以上のような梗概から読み取れる「女面」の解釈は、三重子自身に自身の孫を生ませる物語であるというものだろう。またこの「企み」を実行する三重子のあり方は、「巫女」という言葉でも表現される。例えば、山本健吉は、『女面』を六条御息所的な憑く女性のイメージと「巫女」を結び付けた円地の萌芽的な作品、としている。この

六条御息所の問題は、憑依する―憑依されるという観点へと敷衍できる。というのも『女面』の中で三重子が過去に執筆した「野々宮記」で六条御息所を取り憑く存在として考察しつつも彼女を「巫女」としているためである。一見すると三重子は、この女性の怨念や執念を表現する「巫女的」な女性だと言えよう。しかし『女面』の語りから、実は三重子が泰子や春女に取り憑いたと明確に決定づける叙述を見つめるのは困難である。それにも関わらず、三重子は取り憑く「巫女」として解釈されてきた。

そもそも通常「巫女」は、霊として他者に憑依するのではなく、霊に憑依される憑坐である。そのため他者に憑依するのも「巫女」であるという説明は「巫女」の性質を拡張させていると言わざるを得ない。しかしこれまでごく一部の論を除き、深く検討されずに見逃されてきた。

むろん「巫女」というモチーフそのものがタイトルにまでなっている『なまみこ物語』（一九六五年七月、中央公論社）と比較すれば『女面』における「巫女」や憑霊という要素は決定的な位置を占めるものではないかもしれない。むしろ三重子の「企み」を軸にするのであれば家父長制との関連を論じるべきであろう。しかし、円地作品において「巫女」や「巫女的」な女性というモチーフは重要なものとして捉えられる。そして、『女面』を含む他の円地作品の中で表現される「巫女」は、辞書的な意味である霊媒としての「巫女」に加え、霊であり他者にとり憑くという特異な「巫女」の性質を持っていると解釈できる作品もある。

したがって『女面』は、一般に憑依される役割を持つ「巫女」と

その「巫女」にはつきりと取り憑く性質を導入したため、「巫女」の内実を問う必要があるだろう。なぜなら、三重子と泰子は、憑くものと憑かれるものという差異があるにもかかわらず二人とも「巫女」または比喩的に「巫女」であると説明され、さらに憑く―憑かれるという関係において、その関係を維持するために互いに影響し合っているという共依存的関係が語られているからである。

二 憑く―憑かれるという関係（Ⅰ） 巫女の両義性

憑依や憑霊が学術用語として「一般化したのは、やはり第二次世界大戦後であろう」¹⁶と指摘されている。これを踏まえるなら、一九五八年に初出が雑誌に掲載された『女面』はある程度、憑依や生霊という言葉が一般化されたイメージをもった時代に執筆されたと言えるだろう。またテクストのタイトルが『女面』であったり、各章に能面の名称がついたりした章タイトル¹⁷は、小苺米唄が「仮面がその根源的な形態において、憑依という心的現象と不可分のものである」¹⁸と指摘するように、物語全体が憑依や憑霊と関わり合いを持つことを示しているよう。

憑依や憑霊について、『女面』の中では、「王朝の憑霊についての研究」（二二五頁）と叙述されており、神秘的なもの、あるいは研究対象として伊吹や三瓶たちに捉えられている。しかし物語の序盤で伊吹と三瓶の会話により「霊媒の実験」（二二六頁）の回想が差し込まれる。これは「交霊術の実験」（二二七頁）とも表現されているが、

「奇術」(一二九頁)、「半信半疑」(一二九頁)と三瓶に評され、人為的な現象の可能性を示唆されている。そのため『女面』の憑依や憑霊を單純に靈的なものや神秘的なものとして捉えるだけでは不十分である。さらに「巫女」を例として人間に靈が取り憑く現象を「擬靈媒」(一七四頁)や「心の鬼」(一五八頁)と説明されている。つまり憑依や憑霊は、單純に憑くものから憑かれるものへ、という一方向的な関係だけに回収できないのである。憑かれる側が取り憑かれたかのように演技をしたり、嘘をついたりする可能性と切り離せない。

この可能性に加え、テキストで語られる「巫女」には特殊な性格が付与されている。まずは、比較のために辞書的な「巫女」の意味を確認してから、テキストに導入された特異な「巫女」についての語りを見ていく。そもそも「巫女」(ふじよ／みこ)の辞書的な意味は、「神につかえてその託宣を人に告げる女」¹⁹あるいは、「祈禱を行ない、神託を告げたり、口寄(くちよせ)などをしたりする者」²⁰であり、神や靈などに憑依される人物を指す。例えば伊吹が「僕は一番、靈女というのが気味悪かったな、あの顔はこの間の靈媒より余程コクのあることを言出しそうだった……」(一二九頁)や「泰子さんが靈媒とすれば梅尾三重子は靈そのものだ」(一三〇頁)と説明している箇所は辞書的な意味の「巫女」である。

さらに別の「巫女」のイメージが加わる。具体的には、『源氏物語』で生霊や死霊になる六条御息所を「巫女」としたイメージで、憑依する霊としての「巫女」像である。伊吹が「泰子さんが靈媒とすれば梅尾三重子は靈そのものだ」(一二三〇頁)と述べ、それに対し、三

瓶が「そうかな。梅尾さんでそんな巫女じみた女かね」(一二三〇頁)と返答する場面がある。また三重子が書いた「野々宮記」の中で六条御息所は「古代からの伝統的な巫女的存在」(二五六頁)であり、「男の中に磨滅することの出来ない自我に身を焼きながら、現実のいかなる行動にもよらず、憑霊的な能力によって、自分の意志を必ず他に伝え、それを遂行させねばやまぬ靈女」(二五九頁)であると記述される。つまり『女面』における「巫女」像のもう一つの面として、憑依する霊として「巫女」のイメージが構築されているのである。

ただし上坂信男は「それにしても、神や靈に取り憑かれる古代的巫女——円地氏の挙げる天照大神や神功皇后の例のような——と、みずから人に乗りうつっていく御息所のばあいと同じに考えてよいものだろうか」²¹と疑問を呈している。上坂の指摘は確かに妥当だろう。

しかし、本稿ではこの「巫女」の定義の是非については深く立ち入らない。ここで確認をしたいのは、テキストで示された「巫女」や「巫女的な」女性の性質や性格、概念が拡張したという点である。つまり「巫女」や「巫女的な」女性というこれらの言葉を用いた時、これらの意味には憑く、憑かれる、という二つの意味が内包されているのである。そのため靈媒や憑かれる女性としての意味のみで表現されていた人物も憑く霊となる可変性を持つだろう。反対に憑く霊としての「巫女」も一般的に靈媒である憑かれる人としての可変性を持つのではないだろうか。この点を踏まえると、テキストの中で泰子や春女に憑いたとされる「巫女的」な三重子は、「はじめに」

で確認したように廣尾が指摘した妾あぐりの「代弁者」²²であるという解釈とも響き合うだろう。ただし、三重子は、春女に赤児を妊娠させたことで、あぐりの単なる反復ではないことは明らかである。

三 憑く―憑かれるという関係(Ⅱ)

― 三重子と春女、三重子と泰子

では、テキストの中で「巫女」と重ねられる三重子と泰子、春女との関係について考察して行こう。まず三重子に憑かれていると理解できる春女について、検討していく。伊吹が泰子に招かれ、夜中に榎尾家に訪れるように仕向けられた時、すでに泰子と春女の交換の計画は始まっていた。春女が三重子の「巫女」になったと解釈できる箇所は、「自分の息吹きを春女の中へ吹き入れるように耳の上の後れ毛をかき上げて私語い」(一九一頁)で春女が「静止すると、瞳の動かない厳かな顔になった」(一九一頁)という叙述から推察される。確かに、ここで三重子が春女に憑いたと言えるかも知れない。しかし、ここで春女側の視点に立ち、三重子が憑依したという語りはない。そもそも語りは、物語の最初から最後まで、一切春女に焦点化しない。そのため憑依の決定的な記述だとは言えないだろう。

したがって春女と三重子の関係を念頭に、三重子側から憑く―憑かれるという関係を見て行こう。春女の「瞳の動かない厳かな顔になった」という表情を引き出した三重子の「息吹きを春女の中へ吹き入れる」という行動や、その後の泰子と春女の交換を行った部屋の方を見ながら「静かに動かない顔色は常の通りであるが、その時

三重子の冷たい重みに垂れた乳の下には、妖精の踊り狂うように心臓がときうち、腰から股へかけて漲る逞しい張りが真直ぐ細い足を踏み立たせていた」(一九二頁)という描写は、前述したように確かに三重子が春女に憑いたかのように読まれうる様子が描写されているとは、言えよう。

次にもう一人、三重子に憑かれていると理解できる泰子についても検討していく。テキストでは、前節で確認した伊吹と三瓶らの会話によって、三重子が憑く霊としての「巫女」とされ、泰子が霊媒である憑かれる「巫女」とされている。しかし実は、テキストの叙述から、三重子が泰子に憑いたという明確な描写はない。三重子の憑依については、泰子が伊吹に説明しているに過ぎないのである。例えば泰子は「やっぱりあなたに愛されたいのが本当の私の気持なのかしら、でも、私には何だかそれが皆、うしろでお母さまの仕組んでいることのように思われて口惜しいんです」(二四四頁)と告げつつも、同時に「つまりあの能面の女なのですわ。秘密があの人の中には一ぱいつめ込まれています」(一四三頁)と三重子の内面の不可解さを強調している。そのため、泰子は三重子に本当に憑依された／されていたのであろうか、という疑問が残る。憑依の真偽よりもむしろ泰子の発言は、三重子を憑く女性として表現し、さらに謎として提示しているかもしれないという印象を伊吹や読者に抱かせるものとなる。したがって、自らが憑かれていることを自覚するという泰子の二重性(憑かれている「私」と憑かれている「私」を認識する、もう一人の「私」が、憑かれることと憑かれるふりをする)との区別を曖昧化させるのであった。

さらに泰子は、実際に三重子に「そうするとお母さまの気持ち私が私にすぐ映って来てしまうのですわ」（一六八頁）と告げる行為を通して、憑く―憑かれる関係を相互的なものへと結実させようとする。なぜなら、直接三重子に告げる泰子の行為は、（真偽はともかく）少なくとも三重子が憑く女性であるということを感じているということこそ三重子本人に知らせる効果を持つからである。したがって三重子が実際に泰子に憑依しているのか、していないのか、に関わらず泰子の行為は、三重子の「企み」に共犯的に関わることになるだろう。

そのほかに三重子に憑いたかのような「三重子は泰子に半ば憑りうつっている自分の女のどす黒い逞しさを噛みしめていた」（二〇九頁）という叙述もある。しかし、「野々宮記」で「紫の上や女三宮の病床にまで御息所の死霊が姿を現わすのは、死霊であるよりも、御息所への贖罪を果たしてはいない源氏自身の心の鬼が描き出す反射作用であるとみてもよいのではないか」（一五八頁）や「紫式部の家集」にある「後妻にとりつく先妻の死霊を修法の力で祈り伏せる絵をみて詠んだ」と詞書のついているこんな歌²⁴について、「憑霊が信じられていた時代にも拘わらず、霊媒的なものを信ぜず、物怪を、当事者自身の良心の反射作用であると見ている式部のリアリズムの面」（二六一頁）があると叙述されている。そのため「野々宮記」の中でも憑依が人為的なものである可能性について言及している部分を踏まえると三重子が泰子に憑くのではなく三重子の「心の鬼が描き出す反射作用」という現象なのではないだろうか。確かに、源氏は、憑く／憑かれる関係性の外側にいる。しかし『女面』

のこの場面において、憑依現象は、泰子側からは語られていない。さらに、この場面の次の段落で「三重子の幻覚に、古代の女神が死に捕えられ、冥府に横たわっている姿がありありと浮かんできた」（二〇九頁）と語られる。この「幻覚」がどこから始まったのかは明確には書かれていない。つまり三重子は、泰子に憑依しているのではなく、自身を泰子に投影しているに過ぎないのではないだろうか。なおこれら検討した三重子の霊としての「巫女的な」行動は、いずれも「野々宮記」が発見されてから行われているのは、次節で「野々宮記」を検討する上で重要であることも指摘しておく。

四 「野々宮記」を読むということ

先行研究の中で「野々宮記」は、三重子の内面を書いたものとして理解されてきた。例えば「野々宮記」について亀井秀雄は、「内面記録的なエッセイ」²⁴と述べ、須浪敏子は「三重子の誇り高い大地母神の性格を『源氏物語』の怨霊六条御息所に托して告白した」²⁵としている。確かに「野々宮記」発見後、三重子は泰子に執筆した背景や自身の姦通を告白する。対して、「野々宮記」を最初に発見した三瓶は、独自の調査を行い、伊吹と情報交換をする。彼らが入手した情報は、三重子が夫の梅尾正継との最初の子を妾のめぐりによって流産したというものであった。しかし三重子は梅尾家に残り、秋生と春女を出産して育てた（三瓶の調査では、三重子が姦通した事実までは明らかにできず、彼らは秋生と春女は梅尾家の血を引いていると思われる）。このように三重子の過去は、「野々宮記」と重ね

られる。そして、約二〇年以上が経過した現在の三重子の内面は、物語の後半までほぼ明らかにされない。そのため第一章の終盤で叙述された「野々宮記」の六条御息所の執念は、三重子の過去に起きた「夫との間に不幸な破綻を経験した」（一八三頁）ことに重ね合わされて解釈されてきた。

しかし、「野々宮記」を執筆した当時の三重子の内面が映し出されているという理解ならばありえるかもしれないが、約二〇年が経過したテキストの現在、それを今の三重子の内面と重ね合わせられるだろうか。過去に書いた文章が現在の三重子の内面を映している確証はどこにもなく、三重子の過去と関係ない第三者の伊吹や三瓶らによって重ね合わされたに過ぎない。そのため「野々宮記」が現在の三重子の内面を語るのではなく、「野々宮記」を媒介にして、三重子の「内面」が第三者から倒錯的に生成されたと言えよう。そして、三重子は「野々宮記」の発見後から自覚的に春女や泰子に取り憑く「巫女」として振舞ったり、語っていたりしているのである。

では、テキストの中で「野々宮記」はどのように書かれ、どのように読まれたのだろうか。「野々宮記」の書き手は、三重子である。読み手たちの反応で伊吹の「三重子は六条御息所を仮りて、案外自分の中にある巫女的な性格を語っているのではあるまいか」（一六二頁）というのが代表的なものである。つまり伊吹は、六条御息所と三重子を恣意的に結び付けた。三瓶は、「梅尾女史のほんとうに書いたものかどうか疑っている」（二一二頁）と述べている。加えて伊吹と三瓶は、「野々宮記」と三重子の過去の情報を共有している。泰子は、「野々宮記」読後、三重子に夫以外の恋人がいたことを看破

する。これ以降、泰子は三重子の「企み」に協力する。なお、三重子が「野々宮記」を書いた理由は泰子にだけ「ある人に読ませるため」（一六九頁）と述べた。この彼女の恋人は「野々宮記」を読む前に亡くなる。

そもそも「野々宮記」は、雑誌「清流」で発表され、別刷が作られた文章であった。雑誌で発表されるため不特定多数の読者に読まれるのだが、執筆の動機は一人の読者に向けたものであった。廣尾は「つまり表面上ではあくまでも「清流」に掲載された六条御息所論である」が「三重子が真に伝えたいと思う相手にのみ、その秘密が伝わる仕組み」²⁶だと指摘する。この指摘は妥当である。ただし伊吹、三瓶らは、三重子が「野々宮記」を恋人に宛てて執筆した事情について知ることはできなかったように「野々宮記」は「六条御息所論」であればよい。なぜなら、彼らは三重子に夫以外の恋人がいた背景を知らないため、より三重子を六条御息所と重ねる原動力になるからである。そして泰子は「野々宮記」によって三重子の「企み」に積極的に協力してゆくのであった。

この読書行為を通じて、「野々宮記」の解釈共同体²⁷が形成された。そして三重子は、発見され読まれた「野々宮記」を利用する。イーザーは読書の効果について「このように巻き込まれるところに、読書一般に共通した決定的要素がある」²⁸と述べており、「野々宮記」に関わる人物たちはそれに囚われて行ったのである。つまり「野々宮記」を読んだ三名は、三重子が六条御息所のごとく他者に憑依するかもしれないと想定するのであった。

以上のように「野々宮記」を読むという行為によって、三重子が

六条御息所のごとく他者に憑依するかもしれないという物語が生成される。それは、三重子だけが行っていたわけではなく、伊吹たちや泰子もそれに「野々宮記」を読むことで関係した。そしてその後、泰子、伊吹、三瓶の三人は、その物語を前提にしつつ、三重子に関する情報量の違いによって三者三様のかかわりを彼女と持つのであった。

このような解釈共同体を作り出す「野々宮記」について小林は「野々宮記」同様、『女面』全体が、「男性中心の物語や解釈体系自体を揺るがそうとする円地の野心的企てとして受け止められる」と指摘している。ただし、小林は「フェミニズムの立場からもこの作品は問題含みととられるかもしれない」と述べ、理由を「最後まで夫の家の血筋にこだわる三重子自身が家父長制的規範の囚われ人ともみられるからだ」と言及する。なお、小林はこの点をも踏まえ「つまり、家父長制の支配者としての男たちが生み出した女の誇張された型として示されたのが三重子というわけで、そうした型に体现される女の在り方がいかに「自然さ」を欠き、「人工」的かを露呈することで、円地がそれを笑いかつ揶揄していたととれるのだ」と評価した。小林のように三重子を「男たちが生み出した女の誇張された型」と解釈し、「円地がそれを笑いかつ揶揄していたととれるのだ」とすることで、三重子を評価するのは確かに妥当である。この立場は、従来の先行研究で本作を評価する家父長制への抵抗を三重子像から解釈し、肯定しているものとなる。

しかし、三重子の「企み」の成就には問題があるだろう。梅尾家という父系を排除し、母系の血統を強調しているに過ぎない。さら

にこの立場では三重子のみを評価し、三重子と泰子の双方向的でかつ共犯的關係性を矮小化してしまうのではないだろうか。しかし憑依といった側面は常に虚実というノイズを含まざるを得なく、憑く側の三重子と同じように憑かれる側の泰子も重要な役割を持つ。ここでもう一つの女性の書きものである、泰子の「憑霊考」と赤児の役割を確認することで三重子の「企み」を家父長制への批判という視点以外から引き継ぐ可能性について節を変えて確認したい。

五 赤児と「憑霊考」

春女の生んだ赤児によって三重子の「企み」は、達成された。この赤児は、亡くなった秋生と重なる。例えばこの赤児は、ゆうに「秋生さまにそっくりでございますよ」（二一八頁）と言われる。元来、この赤児を生んだ春女は、女面にも例えられる秋生の双子の妹であり「春女の顔に精神が籠められ、男の線を与えられたのが、そのまま秋生だったのだと泰子は思う」（二七〇頁）。物語の前半、薬師寺頼方が女面の増女をかけた時に泰子は「死んでいたものが生きかえって来た」（二三九頁）と秋生が生き返ったと錯覚したと発言していた。このように秋生は亡くなったが、泰子の視点からは彼が亡霊のように回帰している様子が見受けられる。さらに実際に秋生と春女が双子であったという事実もあるが、泰子側からも秋生が赤児と重なる。例えば、テキストの結末の場面で泰子は春女の赤児について「自分の生んだ子供のように思われるのですもの……」（二二九頁）と述べる。そのためこの赤児は、春女を代理母とした、泰子の息子

でもあり、夫の秋生の生まれ変わりだともいえよう。その意味で、泰子は血縁に三重子ほどには縛られておらず、血統幻想を完全に共有していない。

泰子はこの赤児を見ながら三重子について次のように感じている。

三重子は春女の死を誰よりも悲しみながら誰よりもよろこんでいるに違いないと泰子は思った。すると今までそれに魅せられていた三重子の中の深い井戸のような果て知れぬ冥さがふと底のぬけたように感じられた。それは抛りどころのない頼りなさで泰子を途惑わせた。泰子は切れたテープを手に戻そうとするように空間に眼をさまよわせた。

(二一九頁)

泰子に焦点化された語りの「切れたテープ」という表現によって三重子との関係が、「企み」の達成後、それ以前の関係からの変化が暗示されている。繰り返すが、泰子と三重子の関係は、憑く―憑かれる一方向的なものではなかった。泰子は、三重子の憑坐としての役割を担った時、三重子にも影響を与えていた。加えて「野々宮記」を読んだ三名が三重子の叙述に影響を受けた、与えたりしたのとは前節で確認したとおりである。この他者に影響を与えるという点から泰子という憑坐的な「巫女」が、反対に憑く「巫女」となる可能性もあるだろう。手がかりとなるのは、泰子が秋生の代わりに引き継いだ「憑霊考」と先に言及した赤児である。「憑霊考」は、物語の

中では泰子を書いていく様子のみが示され、完成しなかった。おそらく泰子の関心は「憑霊考」から春女の生んだ「秋生さんに似ている」(二一九頁)赤児へ移動したのである。なお泰子にとって「憑霊考」を引き継ぐ意味は、秋生との共同作業を形に残すための手段だったと言える。春女の妊娠後に「憑霊考」についての記述がなくなるのはそれを意味している。なぜなら、赤児は、泰子にとって「憑霊考」の代替物ともいふべき存在であるからである。したがって、結果的に秋生との共同作業を形に残すという泰子のもうひとつの「企み」の実現となったのである。

さらに、泰子の執筆途中の「憑霊考」が完成する可能性はある。未完成であることで伊吹や三瓶の男性側の解釈から逃れ、泰子の手元に残されている。「憑霊考」のタイトルからは、その言葉の通り「憑霊について考える、憑霊を考える」という内容を推測できる。憑依や憑霊は、三重子の「企み」や泰子と三重子の関係と大いに関わる要素であると言わざるを得ない。そのタイトルを持つ「憑霊考」は、「野々宮記」と対になり春女の赤児誕生の背景を踏まえて執筆される未来もあり得るだろう。そしてそれが泰子によって書かれた時、新たな読者によって、今度は三重子のように憑く「巫女」として読まれる可能性もあるだろう。

泰子の憑く相手は、泰子が三重子から引き継いだ「企み」を継承させる人物である。テクストの中の現時点で最も可能性があるのは、春女が生んだ赤児だと思われる。この点を踏まえることの赤児は男児であり、泰子の「企み」の物語は、また変容していかなるを得ない。なぜなら、円地作品の中では、母子子間の物語は、近親相

姦の様相を呈するからである。例えば『花散里』（一九六一年四月、文芸春秋新社）、『小さい乳房』（一九六二年二月、河出書房新社）、『現代好色一代女』（一九六三年七月、講談社）などがそれである。この赤児が夫秋生の生れ変りという側面があることによって、泰子との疑似的な近親相姦の物語の主人公となる可能性を内包しているのである。

以上のように泰子は三重子の「企み」が達成した証の赤児を手元で育て、その「企み」を引き継いでいる。そしてそれは三重子から泰子への差異を伴った継承、反復となるだろう。

おわりに

ここまで「巫女」という表象の内実を主に三重子と泰子との双方向性の関係を手掛かりに三重子の「企み」との関りについて論じてきた。三重子の「企み」ではあるものの、それに関係する憑かれる存在として泰子や春女がいた。ただし、泰子は単純に三重子に憑かれ支配されていたわけではない。泰子という憑かれる女性がいることを通して三重子は、自身のありようを確認したのであった。そして、泰子もその三重子を確認しつつ、自身のありようを確認する、というテキストでは両者の相互作用が表現されていた。この関係性は、一見憑く―憑かれる関係であるがこれは一方的なものではなく、この関係性こそが両者の主体を表現する双方向性的なあり方であったのだ。

したがって、三重子は泰子や春女がいることで、憑く女性として

存在できたともいえよう。ただし、それは一方的に取り憑き、コントロールすることで成り立つ関係ではなく、共犯的關係でもあった。つまり彼女たちは、三者三様に「企み」の成就に大きく影響を与えたのである。また三重子は、彼女たちのありようを確認し、さらに過去に自身が書いた『野々宮記』の記述も利用した。

そして、三重子の「企み」は、あぐりとの関係から生じたものであり、それは泰子へと形を変えながら継承されていく。また「巫女」の内実も変容していかざるを得なかったのであった。

以上のように「女面」は、憑依現象において憑く―憑かれるという関係が一方向ではなく、憑かれる側から憑く側への影響という興味深い視点も提供してくれるテキストなのである。その視点によって三重子と泰子の両者のあり方が表現されていたのであった。こうして、テキストは、男系の物語と見えながらも、女たちの「企み」が憑依という現象を借りつつ、実質は母系の血筋で継承される、女たちが主権を振る女たちの家の物語であったと言える。そして、泰子はそのような血縁幻想から一歩自由な境地にたどり着くことのできる赤児を手に入れたのである。女性たちの「企み」の物語は生成変化していく。

注

1 引用は、『円地文子全集』第六巻、四三四頁による。

2 亀井秀雄は「まことにアイロニカルなことだが、今や三重子自身、家制度の守り手、すなわち後継者（子胤）を得る性の管

理者に転化してしまっているのである。泰子や春女にとつて、今では、彼女自身が家制度や感性的共軛の呪縛そのものであった」（亀井秀雄「円地文子の世界」、亀井秀雄・小笠原美子「円地文子の世界」一九八一年九月、創林社、一七六頁）と、三重子の「企み」を「家制度」の「呪縛」として解釈した。亀井と異なる評価を行うのは、小林富久子である。小林は三重子の「企み」を「すなわち、巫女としての語りを通して男性中心的物語を揺るがす」（小林富久子「第八章 実りの時」『円地文子 ジェンダーで読む作家の生と作品』二〇〇五年一月、新典社、一八二頁）と評価した。

田中美代子は「三重子は、女権拡張論者の主張するように、性の差別を解消することによってではなく、「女」の「性」に固執し、これを至上のものとして、男性を凌駕するものでなければならぬのだ。純粹培養された女性固有の力とは、万物を産み育む母性であり、自然と交感し、これを操る巫女であり、肉体を餌に男を誑しこむ娼婦である。それはいずれも、自然のアナロジーとして不可知な肉体の力を、男性に対する挑戦の兇器として、意識化し、方法化、手段化したものである」（田中美代子「文学における〈女性〉の逆説——円地文子をめぐって」『ロマン主義者は悪党か』一九七一年四月、新潮社、一五二頁）と述べ、三重子の「企み」と「巫女」を繋げている。

野口裕子は「そして今度は、まるで自分の霊媒のようになってしまった泰子を、娼婦としての身代わりにするのである。同様に、春女も母としての身代わりにほかならない。……三重子、

泰子、春女の三人の女は三重子の中に集約されていることを、この名は示していると考えることができよう」（野口裕子「第二章 古典受容の系譜——古典本文挿入から架空の古典創作へ——第三節 〈野々宮記〉の功罪——『女面』論」『円地文子の軌跡』二〇〇三年七月、和泉書院、一二〇—一二二頁）と指摘している。また、小林富久子も「泰子・春女という二人の若い女を人形使いのように意のままに動かすことで、不実な男とその家への復讐を果たす三重子」（小林富久子「第八章 実りの時」前掲書、一八四頁）と述べている。これらの指摘により、先行研究の多くは三重子が彼女たちを一方的に支配していると解釈してきたと言えるだろう。

鈴木直子「松風・円地文子『女面』と明石一族の物語——シスターフッドへの想像力」、久保朝孝編『源氏物語を開く 専門を異にする国文学研究者による論考54編』二〇二一年三月、武蔵野書院、二二四頁。

注5と同じ。

注5と同じ。

注5と同じ。

廣尾理世子「円地的伝達をめぐって——『女面』論」『近代文学論集』第一六号、一九九〇年一月、五六頁。

廣尾理世子「円地的伝達をめぐって——『女面』論」前掲論文、五九頁。

注10と同じ。

水田宗子は「そのなかでも中心は、六条御息所の生霊を、傷つ

上坂信男「Ⅱ『源氏物語』返照」『円地文子——その『源氏物

山本健吉は、『鹿島綺譚』（一九六三年一月、文芸春秋社）の

「書評」で「巫女的女性」とは、円地氏のこれまでの作品にし

ばしば登場したもので、源氏物語で生霊・死霊となつて源氏の女たちを悩ます六条御息所が原型である。「……」「女面」で氏はそのような女性像を造型しようとしたが、そこでもプロットや道具立てのけばけばしさは目立っていた（山本健吉『東京新聞』夕刊、一九六三年七月二十九日。なお、引用は「解題」『円地文子全集』第九卷、一九七八年二月、新潮社、五〇八頁による）と述べている。

いた女の自我と不燃焼の性として、この視点から独自な『源氏物語』論を展開させる、三重子自身の語りである。「……」／三重

子は、女のセクシュアリティを快楽と生殖に分断して奉仕させてきた男の性と、性差の制度への復讐を、男によつて分断された快楽と生殖のセクシュアリティを逆手にとつて、それを武器として成し遂げる。「……」梅尾の家から家父長の血を追放した三重子は、その家を霊媒として占拠し、女の生霊と怨念の棲み家に変容させたのである（水田宗子「Ⅲ章〈異類〉」としての自己認識——日本近代女性文学における脱出と放浪『物語と反物語の風景』一九九三年二月、田畑書店、一〇五—一〇六

頁）と『野々宮記』の内容とそれを執筆した三重子を評価する。参考 猪熊雄治「女面」、馬渡憲三郎・高野良知・竹内清己・安田義明編、『円地文子事典』二〇一一年四月、鼎書房、七三—七五頁。

語』返照』一九九三年三月、右文書院、一六〇頁。

池上良正「第五章 憑依再考」『増補 死者の救済史 供養と憑

依の宗教』二〇一九年四月、筑摩書房、一七六頁。

各章につけられた能面のタイトルについての解釈は、先行研究

ごとに異なる。例えば、須浪敏子は「女面」の一章、二章、三

章はそれぞれ、「霊女」「十寸髪」「深井」と女面の名がつけられ

ている。そして、それは、三重子の、女をないがしろにした男

に深く崇る怨念、復讐に狂つてさらけ出された自己本位的な女

の欲望、子を失つた母親の悲しみという三重性格を示したものに

はかならない（須浪敏子「女面」論『円地文子論』一九九

八年九月、おうふう、一四九頁）と述べたり、野口裕子は「つ

まり、第一章では、泰子、第二章で春女、第三章では三重子が

中心になるという凝った構成をもっている。「……」このように

『女面』はよく計算された、凝った舞台装置のもとに描かれた作

品なのである（野口裕子「第二章 古典受容の系譜——古典

本文挿入から架空の古典創作へ——第三節〈野々宮記〉の功

罪——『女面』論」前掲書、一一三頁）と指摘したりしている。

小苺米現「憑依と所有——『事柄』と人間の演技」『憑依と仮面

——劇的想像力の世界』一九七二年四月、せりか書房、一九〇

頁。

「ふじよ」『日本国語大辞典 第二版』第一卷、日本国語大辞

典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部編、二〇〇一年一

月、小学館、八四七頁。

「みこ」『日本国語大辞典 第二版』第二卷、日本国語大辞典

第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部編、二〇〇一年二月、小学館、六四三頁。

21 注15と同じ。

22 注10と同じ。

23 亀井秀雄は「春女の「瞳の動かない厳かな顔」とは、三重子の情念を吹き込まれた「女面」であつただろう」（亀井秀雄「円地文子の世界」前掲書、一七四頁）と指摘している。

24 亀井秀雄「円地文子の世界」前掲書、一七〇頁。

25 須浪敏子「女面」論」前掲書、一三三頁。

26 廣尾理世子「女面」再論——「見る」／「見られる」関係から——『近代文学論集』第一八巻、一九九二年十一月、五三頁。

27 西田友美は、「ここにおいては、いわば、六条についての読みを抱えこんだ三重子を、なんとか知ろうとする登場人物——読もうとする読み手——がとりまいていて、そのさまざまな理解——読み——を読むことをふくめて、三重子という主体を読まねばならない。これが『女面』を成り立たせている、ないし『女面』が要求する、強力な読みの同心円であるといえよう」と述べている（西田友美「円地文子『女面』論」『方位』第一三巻、一九九〇年、一二九頁）。

28 ヴォルフガング・イザー『行為としての読書——美的作用の理論』一九七六、響田収訳、一九八二年三月、岩波書店。なお引用は二〇〇五年七月、「岩波モダンクラシック」版、二二九頁を使用した。

29 小林富久子「第八章 実りの時」前掲書、一八七頁。

30 注29と同じ。

31 注29と同じ。

32 注29と同じ。

33 語りの順序で確認をすると、春女の妊娠について最初に言及するのは、伊吹の妻である貞子である。貞子が「秘密探偵社の人」（二〇〇頁）を使って三瓶に春女の妊娠について報告をするのだが、三瓶は貞子と会う前に三重子と会っており「泰子は田舎婆さんの市子の型にはまり過ぎた神憑りの状態だのその間にある言葉だのを、丹念に紙にうつしとった」（一九九頁）という、「憑霊考」を執筆するための作業を行っている。これ以降、泰子が「憑霊考」を執筆する叙述はない。

※円地文子『女面』の引用は、『円地文子全集』第六巻（一九七七年一〇月、新潮社）による。なお、全集に収録されている他の円地の作品は『円地文子全集』（一九七七年九月—一九七八年九月、新潮社）による。また、引用を省略する場合は「…」を使用した。

（さいだ はるな・札幌市立大学・北海道情報大学・

北星学園大学非常勤講師）